

【小説】求嵐

Story by Gurashi

【イラスト】 萌木雄太

Illustration by Yuta Moeki

ヴァルハラ オティンティン館

Valhalla
OtinTin Brothel



試し読み版



BEGINNING NOVELS

Kill Time Communication Presents
Beginning Novels Series

“Valhalla Otintin Brothel”

Story by Gurashi
Illustration by Yuta Moeki

一章 ● 僕の異世界奮闘記	005
二章 ● 夢みたいな初仕事	085
三章 ● とっても素敵なおっぱい	146
四章 ● 褐色のお姫様を守りたい!	225
書き下ろし特別編 ● レ・リ・マ	319

一章 僕の異世界奮闘記

キーンコンカンコンコン

「きりーつ、れーい、さようならー」

「はいさようなら。明日から夏休みだから浮かないように、各自気をつけて……コラア！ 飯島アツ!! 全力で帰るんじゃない！ 滅茶苦茶浮かれまくってるじゃねえか!!」

「ごめんなさい先生！ 急いでるんで！ 宿題はちゃんとやります！ また二学期に会おうねーっ！」

僕は怒る担任と呆れる同級生達には目もくれず、猛ダッシュで廊下を駆け抜け、そのまま学校の校門から勢いよく飛び出した。

そんなに急いでどこに行くのかって？

海？ プール？ それともキャンプ？

残念、どれもハズレ！ せっかくの夏休みに、そんな事してるヒマなんて無いに決まってるじゃないか！

これから二学期までの四十日、やる事といえば……：そ
う！

家に籠もってオナニー三昧さ!!

僕の名前は飯島翔太。

思春期まっただ中。

好きな女性のタイプは金髪巨乳の色白お姉様。でも褐色のお姉様も大好物。

ロリっぽいのもそれはそれでイケる。

とにかく外人女性が好きな、ごく普通の十五歳の健康優良児。

僕の性の目覚めは、中等部に上がる直前。

茹だるような暑い夏のあの日に見つけた、河川敷に捨ててあった金髪女性のエログラビア。

その本をこっそり持ち帰って、部屋でこっそりオナニーしたのがキツカケ。

それからは同級生の女子が急に子供っぽく思えて、金髪でおっぱいの大きな女の人にしか興味を示せなくなった。

でもあれから三年経って、僕の性癖も微妙に懐が広くなったのさ。

何せ金髪だけじゃなくて、黒髪でも赤髪でも銀髪でも、綺麗な外人さんなら誰でもウエルカムだ。

おっぱいの嗜好だって、大きいのも小さいのも気にならなくなつた。でも出来れば大きい方が良いけどね。

そんな僕が子供っぽい普通の恋愛なんて出来るワケもな

くて。

同級生達が甘つちよろい恋愛沙汰に、現を抜かして居る間も、僕は勉強の合間に例のエロ本でオナニーに励む毎日なワケで。

学校から全速力で帰宅した僕は、部屋に入るなりすぐさま制服を脱いで全裸になる。

僕のオナニーは全裸が基本だ。

オカズにされてる金髪お姉様達はみんな裸で僕の勝手な性の衝動を受け止めてくれているのに、僕が中途半端に服を着ているのは失礼にあたるからだ。

両親は共働きで、僕はひとりっ子だからこそ可能なオナニーライフってワケで。

「さあ、待たせたね！ 今日僕を気持ち良くさせてね！」と、僕はエロ本に語りかける。

頭がおかしくなったとか思わないでね？

これは当然の礼儀なんだから。

初めて出会ってからもうすぐ丸三年、このエロ本様のお陰で僕のオナニーライフはとても充実してる。

僕はエロ本様以外でオナニーした事が無い。

初めての精通を迎えてから今日まで、僕の精液は全部このエロ本様に捧げてる。

あ、でもエロ本様にぶっかけたりはしてないよ？
思えばこのエロ本様は随分変わってる。

初めて河川敷で出会った時は、エロ本だとは思わなかった。
た。

何せ表紙が普通のエロ本っぽくなくて、初めて見た時は外国の辞書か何かだと思った。

分厚いカバーに金の装丁が施されてて、あと何か薄ぼんやりと光ってた。

でも僕は勇気を振り絞ってそれを手に取って、そして開いた。

そこには僕が今まで知らなかった世界があった。
見るからに外人のお姉様が、全裸や半裸で僕に微笑みかけてたんだ。

ゲームとかアニメで見るようなファンタジー風の衣装を着たお姉様達は、みんなスゴく綺麗な人達ばかりだ。

ある人は豪華なドレスをエロく着崩したお姉様風。

またある人は武骨な全身鎧の胸当てだけを外して、スゴく大きなおっぱいを見せている女騎士風。

惚れ惚れするくらい綺麗な筋肉を纏った眼帯赤髪の女傭兵や、神々しいという言葉がピッタリな女僧侶さんや、はたまた耳が長くて冷たい目をしたエルフとか、とにかく美人さんのバリエーションが豊富なんだ。

そして僕はどのお姉様を見ても、何回でもシコれちゃうんだ。

三年以上ほぼ毎日オカズにしているからね。時には一日複数回しているからね。

学校行事でキャンプや修学旅行の時でさえも、このエロ本様を持つて行って現地で隠れてオナニーするくらいだもん。

僕にとつてこのエロ本様は、もう無くてはならない存在なんだ。

ちなみにこのエロ本様で精通を果たしてから、昨日までで九百九十九回の射精をした。オナニーの回数はバッチリ記録してるからね。

そして今日は記念すべき千回目のオナニーだ。でもこれは通過点に過ぎないんだ。

僕はこれからもこのエロ本様でオナニーをして、二千回目も三千回目の射精も、このエロ本様に捧げるつもりだ。

え？ 飽きないのかつて？

愚問だよ。

呼吸をする事に飽きるのかい？

僕にとつて、エロ本様でオナニーする事は呼吸をする事

と同義なんだ！

とか無駄に熱く語ってる間にも、僕のオナニーは佳境を迎えつつある。

まだまだ成長過程のオチンチンを、僕は荒々しく擦る。

今日はお姉様に精液を捧げようか？

やっぱりお姉様かな？

それとも女騎士さんかな？

でも女傭兵さんも捨てがたいし、他のお姉様方も甲乙つけがたい。

そうこう迷ってる間にも熱いマグマみたいな精液が、僕の金玉からオチンチンを経由して先っぽから今にも噴き出してしまいうさうだ。

「あっあっあっ！ らめつ！ 出るっ！ 精液出ちゃうっ！ お姉様達が全員素敵過ぎて、僕のオチンチンから精液搾られちゃううううううっ!!」

家に誰も居ないからこそ出せる大声をあげて、僕の千発目の精液は呆気なく漏れてしまった。

同年代の男子の精液よりも凄く濃くて大量の精液は、僕のオチンチンの先っぽから放物線を描いて、そのままエロ本様の開いたページへ。

あ、ダメだ。

このままだと、エロ本様に精液をぶっかけちゃう！ エロ本様を汚しちゃう！

薄れ行く意識の中で、僕は空いていた左手で咄嗟とつさにエロ本様を閉じた。

そして僕の精液はエロ本様の表紙にベツトリと降り注いだ。

やっちゃった……そう思いつつ、お姉様達を僕の精液で汚さずに済んだ事に安堵して、ほうつとため息を吐く。

けど次の瞬間、予想もしてなかった事が起きた。

「……え？ な、何？」

精液をぶっかけられたエロ本様の表紙が、うつすらと光り輝いているじゃないか。

思えば最初に拾った時も光ってたような気はするけど、その光もすぐに消えたからあまり気にしてなかった。

でも今の光はあの時よりも強くて、何だか生きてるみたいにその光が強くなったり弱くなったりしている。

そう、まるで心臓の鼓動みたいに……。

そしてその光の点滅は次第に早くなって、光もドンドン強くなって……。

光が強くなり過ぎて、目も開けていられなくらいになつて……。

そこからの記憶は無かった。



気がついたら、薄暗い部屋に居た。

気絶してる間に夜になっていたとかでは無いみたいで。だってその部屋は、僕の部屋じゃなかったから。

床も天井も壁も、全て石で出来た。

コンクリート打ちっばなしのお洒落でモダンなワンルームマンションでよく目にするアレじゃなくて。

本当の石造りの……牢屋だ。

採光の為の小さな窓には鉄格子が張られてて、唯一の出入り口にある扉は、頑丈そうな鉄の扉。

これが牢屋じゃなかったら何なんだってくらい、どこから見ても完璧な牢屋だった。

そんな牢屋の中で、僕は全裸だった。

そして、その牢屋に居たのは僕だけじゃなかった。

牢屋の片隅で膝を抱えてうずくまっていた人達が……全部で五人。

よく見るとみんな僕と同じ年齢か、それよりはやや上っで感じた。

みんな肌が生白くて、髪の毛は金髪とか茶髪とか。ちよつと見ただけで外人だって解る。

アジア人っぽい子は僕以外には居なかった。

そしてみんな、ボロボロで薄汚れているとは言え、服を着ていた。

てか何で僕だけ全裸なの!? おかしくない!?

あ、そう言えばオナニーしてたから全裸なのは当たり前なのか。

そうかそうか、納得納得……って納得するか!

何で自分の部屋でオナニーライフを満喫してた普通の男子中学生が、こんなことも解らない牢屋の中に閉じ込められているの!?

ワケが解らないよ! こんなの絶対おかしいよ!

と、一人で立ち尽くしている僕を、周りの子達は珍獣でも見るかのような目で眺めてる。

まあ全裸の日本人少年がそんなに珍しいのかは解らないけど、そんなにあからさまにジロジロ見なくてもいいじゃないかとは思うワケで。

で、今の僕の状況はどうなっているのか、とりあえず情報収集しないと。

僕は最も近くに居た、金髪の子に話し掛けた。

「は、はろー。ないすとうーみーちゅー。ま、まいねーむいず、ショータイージマあ……」

日本人特有の愛想笑いを貼り付けながら、中学英語で自

己紹介する僕。完璧だ。

さあ、金髪少年のレスポンスや如何いかに!?

「……え? な、何? 何なの君……う、薄気味悪いんだけど?」

思いつきり日本語で返されましたとさ……。

チクシヨウ! 日本語喋れるならそう言えよな!

てか薄気味悪いってヒドくない!?

そう思いつつも、僕は愛想笑いを絶やさずに尚も話し掛ける。

「あ、ごめんね。ちよつと聞きたいんだけど、ここはどこ

なの? 僕は何でここに居るの? 君達は誰? あ、ちな

みに僕の名前は翔太。よろしくね」

そう言つて右手を差し出す。

でも金髪少年はその手を不思議そうな目で見ている。

握手も無しとは……嫌われているのか警戒されているのかは解らないけど、前途多難だなこりゃ。

「えつと……僕はカール。ここは多分、帝都の奴隷商館で……僕らはここからどこかに売られる事になると思う……」

……

「……え?」

戸惑う僕を置いてけぼりにして、カールという名の美少年は尚も語り続けた。

「それで、君は……僕達がここに来てすぐに、何だか解らないけど部屋の中央がバァーッとまぶしく光って……で、光が収まつたら君が裸で倒れてただけ……逆に聞きたいんだけど、君は何なの？ どうやってここに現れたの？ ひょっとして魔術師か何かなの？ というか、どうして裸なの？」

うーんつと……オツケー、いくつか解った事がある。

まず、ここは日本じゃないらしい。

日本語喋ってるじゃん云々は置いといて、帝都だか奴隷だか魔術師だかっていう日本では聞き慣れないワードがすんごく気になる。

そして、僕自身がどうやってここに来たのかは解らない。

そう言えば光がどうか言ってたっけ……ってか、僕が

エロ本様にぶっつけた時も、エロ本様が光って……。

エロ本様が……光って……エロ本様……………。

「エロ本様は!？」

僕がいきなり叫んだ事で、牢屋の中に居た子達が全員ビクッと身体を震わせた。

でもそれどころじゃない！ 僕はそれ程広くもない牢屋の中をくまなく搜索した。全裸で。

それなのに僕にとつては命よりも大切なエロ本様が、牢屋のどこにも見当たらないじゃないか！

ザッケンナコラー！ あのエロ本様が無かったら、僕のオナニーライフはどうなるんだよ！

僕が一生オナニー出来なくなつたらどうしてくれるんだ！ ナンオラー！ スツゾオラー！

宇宙オナニーマイスターのクリボーも激おこぶんぶん丸だよ！

僕が目を血走らせて牢屋をウロウロしていると、鉄扉の方からガチャガチャと音がする。

そして鉄扉が重々しい音をたてて開き、そこから二人の男が姿を現す。

茶髪と赤髪の、どちらかと言えば中年風の男達は、僕の姿を見るなり、こう叫んだ。

「だ、誰だお前は!？」

ですよねー。



それから僕は、あっさりと捕まってしまったワケで。

って言うか元々脱出不可能だったけど、これで完全に不審者扱いだよ。

そりやそうだよ。奴隷として捕まえてる金髪美少年達の牢屋に、いきなり全裸の日本人が現れたら警戒しますよね。

とりあえず僕と奴隷少年達は、牢屋から出される。

少年達は一列に並んで、前と後ろをさっきの中年男が固める。

僕だけは先頭の男に腕を掴まれながら歩く。

「イデデデ！ そんなに強く掴まなくても逃げませんってば！」

「うるさい！ 良いからさっさと歩け！」

牢屋を出てしばらく歩くと、赤い絨毯が敷かれた廊下に出る。

そこは西洋風の立派な館で、これだけでもここは日本じゃないんだなあという考えに到るワケで。

廊下をズンズンと、腕を掴まれながら歩く僕。

やがて広い空間に出る。

天井には豪華なシャンデリア、壁には燭台と高そうな絵画に、大きな両開きの木製の扉。

そこに何人かの男達に囲まれた、とても肥え太ったオッサンが居た。

頭のとっぺんから爪先まで、高そうな服とアクセサリーに身を包んだ、まさにザ・成金と言わんばかりの老人だ。

そのハゲデブジジイは、やって来た僕達（というか僕）を見るなり、鋭い声を投げ掛けた。

「おい、何だソイツは？ どこから連れて来た？」

「そ、それが……いつの間にかコイツ等の牢屋に居まして……何故か服も着ていないし、私達にも何だかよく解らんです」

説明を求められた中年男も、困っている。

正体不明の日本人でどうもすみません。ってか僕の方が遥かに困ってるんですけどね！

「ふむ……だがよく見れば、黒髪で黒目……僕も奴隷商になつて長いが、黒髪黒目なんぞ見た事は無いぞ」

「え？ そうなんですか？」

あ、やばい。普通に聞き返しちゃった。

でも仕方ないじゃん。この典型的な日本人の容姿の僕を初めて見るなんて、外国にしてもどこだよって思っちゃったんだから。

「……おい、ソイツをここに連れて来い。もつとよく見たいからの」

「はっ！」

中年男に腕をグイッと引つ張られ、僕はハゲデブジジイの目の前まで連れていかれる。

そしてハゲデブジジイは僕の髪を触ったり、顎をグイッ

と掴んだり、僕を振り向かせて後ろからジロジロ眺めたりと、やりたい放題だ。

たとえ男とは言え、全裸をマジマジと見られるのはイヤな気分だ。

どうせなら外人のお姉様にだったら、穴が開くくらいジロジロと見てほしいのになあ……。

「ふむ。黒髪黒目もそうだが、肌の色も我々とは違う。面白い貴様、帝国人ではないのか？」

「えっと、あの……に、日本って国から来ました」

「ニホン？ どこだそれは？ 未だに帝国の統治下に無い国があるとは知らなんだが……？」

帝国？

おかしい。僕の知ってる地球上の国には、王国はあっても帝国は無いはずだ。

そもそも日本の皇族以外に、エンペラーを名乗る一族が居るはずが無い。

「えっと……あの、ここは何という国なんですか？」

「何い？ 貴様、竜神帝国を知らんのか？」

リュウジン帝国？ 何それ？

「このエルヴァーン大陸の覇者であり、大陸全土を統一してから三千年が経つというのに、我が偉大なる竜神帝国の名を知らぬとは……貴様どこの田舎で育つたのだ？」

と、ハゲデブジジイは可哀想な子を見るような目を向ける。

シラネーヨ！ 何だよその厨二設定は！

異世界かよ！

……異世界？

あれ？ ここ異世界なの？

「まあ良い。容姿は十人並みじゃが、黒髪黒目など珍しいからな。女達に高く売れるじやろう。連れて行け！」

「はっ！」

「え？ あの、どこに!?!」

僕が慌てふためいていると、大扉が開く。

そこから見えるのは外の景色だ。

大きな庭と高い塀の向こうには、白馬仕立ての豪華な馬車と、その後ろに囚人を運ぶかのような鉄檻の護送車があつた。

「決まっておる。奴隷商たる儂わづの最大の取引先……」

大扉を開けた先には、ここが日本どころか地球上のどこでも無いと確信させるような景色が広がつて……。

「帝都で唯一の、そしてエルヴァーン大陸最大の男娼館……女達にとっての楽園、そして男達にとっての地獄……」

アルハラ・オティンティン館じゃよ」

……ここは本当に異世界なんだなあとこの感慨は、これから行く目的地のふざけた名前により、綺麗さっぱり吹っ飛んだワケで。

馬車は揺れる。

空は快晴、陽射しは強いけど吹く風は心地よく、全裸の僕も風邪をひかずに済みそう。

つてか未だに全裸でございますよ、ええ。

綺麗に舗装された石畳、レンガ造りの立派な家並、空を飛ぶ見事なドラゴン……。

はい、これは紛れもなく異世界です。

西洋風の街はともかく、ドラゴンはさすがに……ねえ？
白亜のドでかいお城も、空飛ぶドラゴンも、よく見りゃ馬つぽいけど微妙に馬じゃない生き物（六本足）も、異世界じゃないと逆に説明つかねーよつてなモンです。

そっかー異世界かー。オナニーしてたらいつの間にか異世界に來てましたつてかーアハハハ。

つてか笑えないよ！

と独り寂しくキレてても埒が明かないから、護送馬車でドナドナされる道すがら、僕は隣に居るカールから色々な情報を聞き出した。

曰く、ここは竜神帝国の帝都で、あの馬鹿デカイ城には皇帝様が住んでいるのだそう。

竜神帝国はその強大な武力を背景に、三千年前にエルヴァーン大陸とやらを統一したんだとか。

何でも竜神帝国には竜の加護とやらがあつて、皇帝の一族は竜と人間のハーフである竜人で、騎士団の中にはドラゴンライダーも居るらしいですよ奥さん。

ドラゴンライダーですよ？ ああ飛竜とかに乗って槍でチクチクするヤツですよ？

そんなチート武力を擁する帝国に、他の国は為す術なく併呑又は滅亡させられ、三千年の治世を経ているらしい。

そして、帝都はこのエルヴァーン大陸で最も栄えている都市で、人口はウン百万人ともウン千万人とも。

そんな大都市に娼館が一つきりつてどうなのよとは思つたけど、そもそもその……何だっけ？ ヴアルハラ・オティンティン館つて何なの？

「ヴァルハラ・オティンティン館は、皇帝陛下御用達の娼館なんだよ」

と、カールが教えてくれる。

つてか、太陽の下で見るとカールつてはマジ美少年。同性の僕でもドキドキするくらい、完璧な金髪美少年。

そんな美少年の前で全裸な僕。死にたいくらい恥ずかしいんですけど！

「つてか、皇帝が娼館なんか利用するの？」

それって日本で言うところの、徳川の將軍様がわざわざ吉原とかに通うって事？

「いや、直接通うワケじゃなくて……僕も噂でしか聞いた事は無いんだけど、ヴァルハラ・オティンティン館で人気になった男娼は、いつかあの城に呼ばれるんだ。そこで陛下に見初められた男娼は、晴れて陛下の側室になれるらしいんだつてさ」

……ん？

「え、ちょっと待って？ 男娼だよね？ 男だよね？ 男を側室……つまり愛人にするの？ 皇帝つてホモなの？」

その想像に、思わず僕のアナルがキュツとなる。ただどカールは、そんな僕をキョトンとした目で見つめる。

「……ショータ、何言ってるの？ つて、もしかして偉大なる皇帝陛下を知らないの？ 君つてどんな辺境から来たの？」

酷い言われようだ。

知るハズないじゃん！ 地球人だもの！ 異世界人だもの！

と叫びたいのをグツと堪える。異世界から来ましたなんて言おうものなら、ピーだと思われるからね。仕方ないね。

「あのね、竜神帝国の偉大なる皇帝であらせられるアンネリーゼ陛下は女性だよ。昨年戴冠されたばかりの、二十二歳の若き女帝なのさ」

「え？」

「陛下だけじゃないよ。近衛騎士団も竜騎士団も、宮廷魔術師も司祭様も、竜神帝国の要職は全て女性が取り仕切っているんだ。これって常識以前の話だよ？」

呆れたように話すカール。

「ただそんな説明も、僕にとつてはどうでも良く……はない。とつても重要だ。」

「そうだ。帝国で唯一にして最大の『男娼館』だ。」

「つ、つまり、男娼が居るつて事は、お客さんはみんな女性つて事なのかい!! そうなのかい!!」

「何をそんな当たり前の事を……そりゃそうでしょ。だつて帝国だけじゃなく、このエルヴァーン大陸では男は女性の性処理道具でしかないんだから」

性処理道具……。

「基本的に男には人権は与えられてないんだ。僕達みたいな若い男は、女性の慰み物になって子種を捧げるだけの家畜に過ぎないんだよ」

慰み物……。

「それを不満に思つて反旗を翻そうなんて男は居ないよ。たとえ居たとしても、あつという間に竜騎士団に全滅させられて終わりなんだから。僕達に出来る事は、女性の相手をして僅かばかりのお金を稼ぐ事くらいさ。でも、ヴァルハラ・オティンティン館で人気が出れば、アンネリーゼ陛下はともかくとして貴族や大商人の愛玩奴隷くらいにはしてもらえるかも知れないよ」

愛玩奴隷……。

「正直、野蛮で暴力的な女性の相手なんて僕もイヤで堪らないよ。でも中には酷い犯され方をして、自殺しちゃう男も居るんだ。その点、ヴァルハラ・オティンティン館なら男娼の管理もキチンとして、客もそんなトラブルを起こさない優良な客ばかりさ。所詮僕達は性奴隷として生きるしかないんだから、せめてちゃんとした扱いをしてくれるヴァルハラ・オティンティン館に売られるのは、むしろ幸運な事なんだよ」

酷い犯され方……。

「……ねえ？ さつきから黙つてるけど、やつぱり怖いのか？ 大丈夫だよ。皇帝陛下御用達の娼館で、男娼相手に無茶するような女性は居ないよ。それに、ちゃんと腕利きの用心棒も居て……って、え？ 笑つてる？」

「はは、はははは……」

突然笑いだした僕を、カールはまるで気が狂れた人間を見ているかのようだ。

けど、そうじゃない。

今、僕の身体を支配してるのは恐怖や絶望なんかじゃない。

これは……歓喜だ。

そうだ。すぐに気がつくべきだったんだ。

帝都とやらの広い大通りを行く護送馬車を、興味深そうにマジマジと見つめている人々に。

その全てが女性なんだ。

結婚適齢期なお姉様も、熟したマダムも、幼女と呼んでも差し支えないお嬢ちゃんも。

赤い顔で、キラキラした目で、舌舐めずりをしながら。僕を見ている。

立ち上がった僕の裸を見ている。

馬車の揺れと同期して、左右にブラブラと揺れる僕のオチンチンを見ている。

この状況を喜ばずして、何を喜べつて言うんだ!?

現代日本ではどんなに望んだって手に入らなかつたものが、この異世界ではスナナリと手に入りそうなんだから!

僕は鉄格子の隙間から手を出して、観衆のお姉様達に笑顔で元氣良く手を振る。

それと同時に更にプルプルと揺れるオチンチンを見て、お姉様達は黄色い悲鳴をあげた。

その時の僕は、全能感に満たされていた。

社会的にも、体力的にも、そして性力的にも全て男性よりも女性の方が上回る異世界。

その異世界の中心、竜神帝国の首都で唯一にして、エルヴァーン大陸最大の男娼館、ヴァルハラ・オティンティン館……いい加減長つたらしいのでヴァ・ティン館と呼ぶ事にする。

そんな僕にとってまさに夢のような舞台で、これから何が巻き起こるんだろう……大きな期待と小さな不安で、僕の胸と股間は膨らむ。

この物語は、そんな異世界に迷い込んだ僕が、この竜神帝国で頂点まで登り詰める物語……だったら良いなあ。



ハゲデブジジイの乗った豪華な馬車が止まる。
そして僕達の乗った護送馬車も止まる。

そこに建っていたのは、何とも馬鹿馬鹿しいくらいでかい豪邸だった。

白亜の城の正門から伸びる大通りに面した、ひいふうみい……五階建ての大豪邸。

おまけに家の端から端が見えないの。
すつげーわ異世界。ナメてたわ異世界。

恐らくこれが、噂のヴァ・ティン館なんだろうね。

こんな途轍もなく大きな娼館で、僕なんかが本当にやって行けるんだろうか……？

だってカールだけじゃなく、他の子達も本当にイケメン & 美少年で、僕なんかでは到底歯がたたない。

世のお姉様達も、どうせ高いお金を出して楽しむならカール達みたいな美少年とって思うだろうし……。

自信無くすわあ……せめて僕にも何らかのアドバンテージが欲しい。

ハゲデブジジイは僕の黒髪黒目が珍しいとは言つてたけど、それだけで何とかなるとは思えない。

とりあえず、やる気を見てもうしかなないワケで。
誠心誠意、お姉様の為に尽くします！ 御奉仕もたくさん覚えます！ 他の子達より料金お安めにしますよ！

つてな具合に、容姿以外のアピールポイントを探すしかないワケで。

「よし、まずはこの館長にお目通りする前に、貴様らの身なりを綺麗にせねばならん。この娼館で風呂を借りれるから、まずはそこで貴様らの垢を落とす事にする」

そしてハゲデブジジイは、僕をチラリと見る。

「貴様は……まあ汚れてはおらんが、いい加減服を着させねば女達の目の毒だ。ついでに風呂に入つて、適当に服を見繕ってもらえ」

とだけ言い、自分はお供の家来らしき男達を二人連れて、娼館の中に入ってしまった。

どうしたものかと僕もカールもポツンと佇たずんでいると、ハゲデブジジイとは入れ替わりに、何人かの女性達が僕達の方へ向かつて来る。

つてか、あれつて……まさか……！

メイドさん!!

マジ!? リアルメイド!?

うっひょー! 異世界スゴい!

僕はこの奇跡の出会いに、胸と股間を更に大いに膨らませた。

ただ膨らませてるんだよ、なんて野暮なツッコミは無しでお願いします。

メイド来た! 秋葉原にたむろしてるあんな偽者じゃな

い、本物の外人メイドさんだ!

黒を基調としたドレスにエプロン、清楚な長いスカート、白の手袋……本当に本物のメイドさんだ。

神様……仏様……素晴らしいプレゼントをありがとうございます!

この世に男子として生を得て、こんな綺麗なメイドさんに出迎えてもらえる日が来るなんて……僕は溢れる涙を抑える事が出来ずに、泣いてしまった。

「よく来たねカワイイ子猫ちゃん達! アタイ達がこの娼館の雑事を取り仕切るメイドで……つて、何でコイツ泣いてんの?」

メイドさん達を前にして、咽び泣いている僕は当然みんなの注目を集める事になる。

「ハッ! もう故郷が恋しくなっちゃったのかい? それともここでの地獄のような毎日を想像して、恐怖でブルつちまってるのかい? でもお生憎様だよ! このヴァルハラ・オティンティン館の門を潜つちまったからには、アンタ達はもうここから逃げ出す事は出来やしないのさ!」
（大丈夫です。むしろまだ何もされていないのに逃げたくはありません!）

「ここから抜け出せる方法は二つ。一つは自分の売られた金額の二倍の金を支払つて、自分自身を買い戻す事。もう

それから僕は、肩だけじゃなくて二の腕や掌までマッサージする。

メルセデスさんはリラククスした様子で、僕のマッサージを何の抵抗も無く受けてくれる。

「はあぁ♡ ショータは本当にマッサージが上手いなあ……見直したぞ」

そう言つてニッコリ微笑むメルセデスさんは、とても綺麗で。

さつきまでの冷たく厳しそうな印象のメルセデスさんはどこにも居なくて。

今はもう、精一杯マッサージをする僕を優しく見守るお姉ちゃんの顔になっていた。

さすが常連のメルセデスさんだ。

こうやつて僕を本当の弟のように扱つて、気分を乗せてくれてるんだ。

僕もその期待に応えないと！

「さ、メル姉ここに寝転んで」

僕はメルセデスさんの手を引いて、ベッドの上に寝るよう要求する。

更なるマッサージを行う為。

せっかくだから足腰のマッサージもしたいと言つたら、メルセデスさんは案外すんなりとオツケーしてくれた。

やつぱり女騎士つて疲れるのかな。具体的にはOLさんくらい。

OLさんもマッサージとかリラクゼーションとかリフレクソロジーとかアロマテラピーとか、癒し関係のものが大好きだからね。

とここで、突然僕の中の悪魔が肩越しに囁く。

「おい、チャンスだぞ。マッサージするのに邪魔だから、服を脱いでつて言えよ。そしたらこの姉ちゃんは脱いでくれるぜえ？ 女騎士様の生パイオツが痒めるぜえ？」

ハッ！ その可能性は考えてなかった！

でも確かに……背中や足腰のマッサージをするなら、なるべく服は無い方がいいよね？ いいよね？

すると今度は、反対側の肩から僕の中の天使が囁く。

『だとしても、パンツだけは残してあげなさい』
わっかりました天使様！

「あ、あの！ せっかくマッサージするんだから……ふ、服は脱いだ方が、い、いいかなあ……なんて」

「む、そうか……そうだな。ではそうするとしよう」と言つと、メルセデスさんは何の躊躇いもなく脱ぎ出した。

それはもう、言い出しつぺの僕が慌てるくらいに鮮やかに。

男らしい脱ぎっぷりに思わず見蕩れちゃうワケで。

メルセデスさんは全体的にスラッとした細身のボディード。

でもそれこそシャルさんやウルスラさんとは違うタイプの魅力がある。

シャルさんはふつくらタイプ、ウルスラさんはムチムチタイプ、そしてメルセデスさんはモデルタイプなんだ。

僕はそんなスリムなメルセデスさんにも、強烈に欲情するんだよね！

オマケに紐パンですよ皆さん！ そりゃ欲情するつて！「脱いだぞ。このベッドに寝ればいいのだな？」

「あ、うん！ う、うつ伏せでね！」

メルセデスさんは僕に推定Bカップおっぱいを晒しても全く恥ずかしかる様子も無く、堂々としてる。

きつと僕を完璧に弟として見てるんだ……すつかり姉役になりきってるんだ！ プロフェツションナルうつ！

じゃあ僕も、そんなサバサバお姉ちゃんに密かに欲情しちゃうムツツリな弟を演じるぞ！

でも本当は演じる必要も無いくらいに欲情しちゃってるつてのはナイショだぞ！

それにしてもメルセデスさんの背中はスゴく綺麗で、僕は思わず生唾を飲み込んでしまう。

背中から腰のくびれ、小さめのお尻と引き締まった太もものラインが、もう何て言うか芸術作品。神が創りたもうた的なアレ。

今からこの芸術作品に、僕が……触れる……。

僕はズボンの中でカチコチになったオチンチンをメルセデスさんの身体に触れさせないように気をつけながら、うつ伏せになったメルセデスさんの身体に跨がる。

そして、そのしなやかで筋肉質な背中にゆつくりと指を当てる。

「んっ……くあっ……いいぞショータ……お前は本当にマッサージが上手いなあ……」

肩甲骨から背骨のラインを上がつたり下がったりする度に、メルセデスさんが気持ち良さげな声を出す。

その悩ましげな声を聞く度に、僕のオチンチンはどんどん硬くなっちゃうワケで。

真っ白でホクロすら無いメルセデスさんの肌は、徐々に赤みを帯びて桜色に染まる。

ああ……綺麗だあ……。

背中から腰、腰からお尻、太もも、ふくらはぎ、足の裏……。

僕は朦朧となりながら、ゆつくりと丁寧にメルセデスさんの身体を採み解す。

「はあ……あふつ……んんつ……シヨータ……シヨータあ……♡」

ダメだよ……メル姉……。

そんなエロい声出しちゃ……僕、もう……。

僕は、メル姉のパンツを脱がす為に手を伸ばして……。

ポォーン♪ ポォーン♪

「わ!? な、何?」

突然鳴り響いた音にビックリして、僕は手を引つ込める。

見ると、部屋に置かれた時計の針が九時五十五分を示していた。

あ……いつの間にか二時間経つてたのか……。

マッサージに夢中になって、時間を気にするのを忘れてた。

メルセデスさんにオチンチン硬くなつてのを気づかれなくて良かったってホッとする反面、メルセデスさんに僕の卑しくて浅ましいオチンチンを見てもらえなくてちよつとガツカリもしたり……。

僕は気持ちを落ち着ける為に二〜三回深呼吸をして、まだうつ伏せのままのメルセデスさんに声を掛ける。

「ご、ごめんなさいメルセデスさん……もうすぐ終了のお時間なんで……」

でもメルセデスさんは動かない。

うつ伏せになつてから、表情も見えない。

「あ、あの……メルセデスさ……うわあ!」

と、急にメルセデスさんが身体を起こしたから、僕はベッドの上をゴロンと転がった。

そんな僕には目もくれず、メルセデスさんはそのままベッドから降りた。

ああ、せつかく僕を選んでくれたのに、マッサージに夢中になつて全然性的なサービスをしてあげられないまま終わっちゃったから、怒ってるんだ。

と、僕は思った。

でもメルセデスさんは何も言わず、部屋を出て行った。

……パンツ一枚で。

ガチャツツ、バタンツツ。

「……え? ちょ、メルセデスさん!? 服! 服忘れてますよお!」

でも僕の声が聞こえていないのか、はたまた聞こえてるのに無視されたかは解らないけど、メルセデスさんは戻って来なかった。

どうしよう……滅茶苦茶怒ってるじゃん!

真っ裸で帰るくらい怒ってるよおおお!!

ヤバイ……これ下手したらウルスラさんとか責任者出て

来いレベルで怒ってるじゃん！

あああああつっ！ 僕の馬鹿馬鹿馬鹿アツ！

自分の欲望を優先して、メルセデスさんの身体に触ってばかりで、時間を忘れてマッサージしかしらないなんて、プロの男娼失格だよお！

どうしようどうしよう……と、とにかく謝ろう！

いつ帰って来るか解らないけど、来たら全力で謝って、そして……。

ガチャツ、パタンツ。

でもメルセデスさんはすぐに戻って来た。

出た時と同じ、パンツ一枚の姿で。

「えっ……？」

僕がポカーンとなって立ち尽くしていると、メルセデスさんが厳しい顔で僕に声を掛ける。

「何をしている？ マッサージの続きをやれ」

そう言って、ベッドに座った。

「え、あ、でも、時間が……」

「延長して来た。今から閉店時間まで、私はお前の姉であり、お前は私の弟のままだ」

……ええっ!?

あ、さっき部屋を出たのは、フロントに時間の延長を申し出に行ってたからか！

ってか閉店時間までって、今日一日は僕はメルセデスさんの貸し切りか！ 嬉しいけど。

「さあ、時間はまだ充分にある。私がいいと言うまで存分にマッサージしろ」

そう言ってメルセデスさんはベッドに横になる。でも、何故か仰向けに。

「え、あの、メルセデスさん？」

「メルセデス、さん……だど？」

「あ！ いえ、あの、め、メル姉？ 仰向けだとマッサージが出来なくて……」

お腹のマッサージなんてやった事無いし、太もものマッサージはさつきやったし……。

「何を言っている？ 胸のマッサージがまだだろう？」

……胸？

オパーイ？

「早くしろ。弟は姉の言う事を素直に聞くものだ」

「う、うん！」

やったああああ！ おっぱい揉めるうううううっ！

「んっ……ふうっ、ふうっ……んんっ♡」

スゴい。メル姉のおっぱい柔らかい。

小ぶりでもちゃんと柔らかい。おっぱいってスゴい。

ああ……乳首もピンク色で綺麗だ……。

指で摘まむと、コリコリしてて面白いや……。

「んひっ♡ ば、馬鹿ア♡ そんなトコ、ダメえ♡」

「ち、乳首のマッサージだから♡ ここ、スゴく凝ってるから、コリコリしてマッサージしてるんだよ♡」

コリコリクリクリコリコリクリクリ。

しゅごい♡ 乳首しゅごい♡ ずっとコリコリしてたい♡

♡

ああ……それにしてもメル姉の感じてる顔、スゴく……。

「カワイイ……♡」

「な、何を言っている!? お、女に向かって可愛いなどと

……んんっ!？」

僕は何か反論しようとするメル姉の唇に、自分の唇を重

ねて塞いだ。

唇と舌のマッサージだから。キスじゃないから。

でもつきり怒られるのかと思つたら、メル姉は僕の頭を抱いて、積極的に唇と舌のマッサージを受け入れてくれた。メル姉つてば超優しい。

唇と舌とおっぱいと乳首、同時にマッサージ。

時には優しく、時には強く。

メル姉の身体の疲れを癒す為に、僕は誠心誠意マッサージする。

でも僕の手は次第に下へと下がって、その手をモジモジと太ももを擦り合わせて切なそうにしている部分へ這わせる。

クチュツ、と指に粘り気のある液体が触れた。

「ふひいっ!? お、おまつ、どこを触ってる!？」

「ま、マッサージだから! オマ○コのマッサージだから!」

僕は最低の言い訳をして、そのままパンツ越しにクニユクニユクってオマ○コを採み解す。

ピツタリと閉じられていた太ももは徐々に開いて行つて、やがて大股開きで僕の手マン……じゃなくてマッサージを受け入れてくれた。

メル姉優しい♡ メル姉好き♡

「んおっ♡ ふおおっ♡ い、いいぞ♡ お前のマッサージ

は最高だあ♡」

メル姉に褒められた。嬉しい。

だからもつと褒めてほしくて、僕はもつともつと頑張る事にした。

仰向けになったカエルみたいな体勢のメル姉のパンツの中に手を差し入れて、右手でグジュグジュジュポジュポとオマ○コを念入りにマッサージして、左手はメル姉の右おっぱいを優しくモミモミコリコリ、そして唇と舌で左おっぱいを丁寧にチューチューペロペロとマッサージする。

「はひいつ♡ しゅごつ♡ こ、こんなマッサージはじめてえっ♡♡♡」

よかった、メル姉がスゴク喜んでくれる。

僕はメル姉にもっと気持ち良くなってほしくて、更には手と指と舌をフル回転させる。

「あっあっあっ♡ も、もうらめっ♡ イクっ♡ こんなしゅごいマッサージされたら、もうイッチャう♡ 弟にイカされちゃうううううっ♡♡♡」

メル姉が叫んだと同時に、僕の右手首の辺りにプシャップシャッと熱い液体がかけられた。

その液体は、僕がメル姉のオマ○コの奥をグリグリとほじくるようにマッサージする度に、どんどん噴き出るんだ。オマ○コから噴き出た雫が、窓から射す太陽の光を反射して、キラキラと虹色に輝いた。

まるで魔法の噴水だ。

その綺麗な光がもっと見たくて、僕はメル姉のオマ○コを一生懸命マッサージして、プシャップシャッと煌めく噴水を楽しんだ。

その間、メル姉がずっと「イグッ♡」とか「らめっ♡」とか「しぬうっ♡」とか叫んで、ブリッジしながら腰を突き出してた。

たっぷり十分くらいオマ○コのマッサージが終わって、メル姉はぐったりしてた。

でもいい感じに身体中の疲れがとれたみたいで、ゼエゼエと肩で息をしている。

よかった。メル姉に満足してもらえた。

こんな僕でも、誰かの役に立てるんだって解って、僕はちよつとだけ涙ぐんでる。

でも僕は今、深刻な危機に晒されてる。

僕のおチンチンが、かつてない程に腫れあがってるからだ。

こんなに大きくなったのは初めてで、昨夜シャルさんにフェラチオされた時よりも大きくて、硬い。

マッサージされている時のメル姉がエロ過ぎて、僕のおチンチンが痛いくらいにおつきつきしてる。

フェラチオでもオナニーでも何でも良いから、とにかく射精しないと、おかしくなっちゃいそうだ。

そして、そんな極度の興奮状態の僕の目の前には、メル姉さんのヒクヒクと動く、ピンク色のオマ○コが……！

ダメだ！ それだけはダメだ！

僕の中の悪魔と天使に聞くまでもなく、今の僕は新人で、ここは『人』の部屋で、ヴァ・テイン館の決まりで、お客様とセックスしちゃうダメなからだから。

シャルさんに聞いたけど、僕の部屋の片隅には水晶玉が置かれて。

あれは僕の世界で言うところの監視カメラみたいな物で、あの魔法の監視装置で僕達の行動を見張ってるらしい。

だから、規則違反なんてしようものならすぐにバレちゃうんだ。

規則を破ってお客様とセックスしちゃうたら、僕はまだしもきつとメル姉にも迷惑がかかっちゃう。

でも……入りたい……セックスしたい……。

童貞を捨てたい……この素敵な女騎士のお姉様に、童貞を捧げたい……！

悩みに悩んで、死ぬほど悩んで出した僕の結論は……。

意識が朦朧としているメル姉のオマ○コに、僕のオチンチンの先っぽを押し当てる。

このままオチンチンを入れれば、セックスになる。

だから僕は、とても上手い言い訳を考えたんだけ。

これなら、セックスしてもセックスした事にならない！

きつとそうに違いない！

メル姉は頭を弱々しく振って、どうにか意識をハッキリさせようとしている。

僕はそれを待って、メル姉に声を掛ける。

「メル姉……ねえ、メル姉……」

「う、うん……どうした、シヨータ？」

目をパチクリさせてメル姉は僕を見て、そして自分の下半身に違和感を覚えたみたいで、ハツとなって目線を下げてる。

メル姉は僕が何をするつもりなのかを悟ったのか、スゴく高速で瞬きをして、口を鯉みたいにパクパクさせてる。

そんなに驚かせちゃったんだ……当然だよ、信じてた弟が、気づかない内に自分をレイプしようとしているんだもの。

でも僕は意を決してこう言ったんだ。

「め、メル姉！ 僕のオチンチンがスゴく凝ってて、我慢出来ないんだ！ だからメル姉のオマ○コでマッサージしてよ！ お願ひ！」

これぞ僕の秘策、名付けて『これはセックスじゃなくてやわらかふわとろオマ○コでカチカチオチンチンをマッサージしてるだけだから作戦』だ！

メル姉のオマ○コは凝りが解れてとても柔らかそうだから、そのやわらかオマ○コで僕のオチンチンを治してよエーンエーン！ これはマッサージだからセックスじゃないから見逃してよエーンエーン！ って事さ！

完璧なロジックだよ！

「……………」

あれ？ でもメル姉はボカーンとした顔で、僕を見上げてる。

……もしかして、まづかつたかな？

これ、言い訳にすらなっていない？

うわあーん！ 完璧な作戦だと思つたのにいっつ！

でも、シクシクと泣く僕の頬つべたを、メル姉の柔らかくて温かい手が包む。

そしてメル姉はこう言つたんだ……。

「し、しししし仕方ないな！ そ、そういう事ならお姉ちゃんに任せろ！ お前のカチカチになつたオチンチンを、お、お姉ちゃんのオマ○コでマッサージしてやる！」

え？ 本当に？

本当にいいの？！

声が裏返つちやつてる気がするけど、本当の本当にいいの？！

「で、でも……僕、オマ○コにオチンチン入れた事が無いから、上手く出来るか不安で……」

ここまで来て急に怖気づいた僕に、メル姉は……。

「なっ、なにいい？ ははは初めてだとお!? そ、それなら尚更お姉ちゃんに任せろ！ 弟のオチンチンをオマ○コでマッサージ出来なくて、何の為のお姉ちゃんか！ は、初

めてだからって何も不安に思う事はないんだ！ さあ入れろ！ すぐ入れろ！ お願ひします入れてください！」

メル姉は声を完全に裏返しながらも、僕を一生懸命に安心させようと優しい言葉をかけてくれる。

信じられない……何て素敵で、弟想いのお姉ちゃんなんだ……。

僕は嬉しくなり過ぎて、自分の感情が上手くコントロー出来なくてポロポロ泣いちゃつてた。

「ど、どうしたショータ!? オチンチン痛いのか？ ならすぐにお姉ちゃんのオマ○コに入れるべきだぞ！ ほら、お姉ちゃんのオマ○コは柔らかくて気持ち良いぞお？」

突然泣き出した僕に、怒るでも気味悪がるでもなく、優しく慰めてくれるメル姉。

ごめんなさい……僕、本当はメル姉とセックスしたいだけなのに……騙しちやつてごめんなさい……。

もしウルスラさんや男娼館の人達にメル姉が怒られた時は、僕が全力で庇うから。

男として、弟として、メル姉は僕が守るから！

「メル姉……大好きだよっ♡」

僕はありつたけの感謝と敬愛を込めて、メル姉の唇にキスをした。

マッサージじゃない、本物のキスを。

メル姉はちよつとビックリしてたみたいだけど、すぐに僕のキスに応えてくれた。

舌を絡められて、舌を吸われて、唾液を暖られて、唇や歯を舐められて、大人のお姉様とのキスに、僕はもうメロメロだ。

でも僕は挫けず、何とか震える手でオチンチンを挿んで、先っぽをオマ○コに押し当てた。

そしてゆっくりと、慎重に、優しく、オマ○コの中に入れてさせてもらった。

「んぐっ?! んおっ、はがっ、あぐっ……ふおおおおおおおおっ!」

「あああ……な、何これ? 何これえええええ!!」

僕はパニックになった。

オチンチンが、ワケ解らなくなつちやうくらい気持ち良い!

ヌルヌルしてて、ギュッと締めつけられて、チュウウウウツて奥まで吸い込まれて、もう何が何だか!

でも、一つだけ解ったのは、メル姉のオマ○コがとんでもなく気持ち良いって事だ。

せつかくの童貞卒業なのに、初めてのオマ○コなのに、楽しんでる余裕なんかこれっぽっちも無くて。

だから僕は、無茶苦茶に腰を動かした。

「ぐひいつ♡ あひいつ♡ んおっ♡ しゅごっ♡ この、はじめてえっ♡ ほ、他の、男娼なんか、目じゃないよおっ♡ ショータシゅごい♡ オチンチンしゅごい♡ これオチンチンじゃないかも♡ チンポ♡ チンポチンポチンポおっ♡」

メル姉が何か言ってるけど、ぼんやりとしか聞こえない。何か言ったり、見たり、聞いたりする余裕なんか無い。

今の僕にはずつとメル姉に抱きついて、おっぱいに顔を埋めながらガンガン腰を動かす事しか出来ない。

だから、僕は自分がいつ射精しそうなのかすら解らなくて、気がついたらもう射精してたんだ。

「ああああああつ!! イグウツ! メル姉のオマ○コに出ししちやうううううっ!!」

ドクツドクツ! ビュルツビュルツ!

「はひひひひひひひ♡ あちゅひひひひひひ♡」

初めてのセックスで初めての中出しを体験しても、僕は止まらない。

何故かって? だつてもう次の射精はすぐそこまで迫っていたから。

「ま、またイクツ! 二発目もメル姉のオマ○コにいつぱい射精するうううううううっ!!」

ビュルルルルツ! ビュツクンビュツクン!



「は、勿体無い御言葉でございます」

うっひゃあ……へ、陛下に褒められてもうた……♡

あのヒルデガルド陛下に……竜神帝國最強の、生ける伝説に……♡

「……ところで、マルグリットよ。お主にちと提案があるのじゃがの」

「は、はひっ!? な、何でっしやるか!？」

アカーン! 緊張し過ぎてドギツイ方言出とるうーっ!

「なあに、難しい事ではない。これは熱砂王家にとつても有益な提案じゃ。お主かイングリット、もしくはヘルガ殿でも構わんのじゃが……シヨータの子を孕んでみる気は無いかや?」

……はい??

「あ、あの……シヨータいうんは、さっきの黒髪の子オでっしやる? 娘らはともかく、フテにまであの子と一発かませっちゆうのは……あの子、見た感じやとかなり幼いんと違いますか?」

と、オカンがヒルデガルド陛下に尋ねる。

そらそつや。あのシヨータっちゆうんはどつ見てもウチよりかなり年下やんか。

さすがにそんなガキンチヨとウチがバコるっちゆうんは抵抗あるし、イング姉ちゃんの相手に相応しいとは思えへ

ん。

ましてやオカンなんて論外やる。犯罪やで犯罪。

「まあ見た目はあんなじゃがの。込み入った事情があつての、幼く見えても歴とした成人じゃ。マルグリット、確かお主と同じ歳じゃつたハズじゃて」

はあ!?! タメ!? ウチとあのガキンチヨが!?

「シヨータの男としての魅力は妾が保証する。何せ金貨十万枚じゃぞ? そんじよそらの男なんぞ束になつても勝ち目は無いわい。ミハエル? あんなハナタレ小僧の子種なんぞより万倍は優秀じゃて」

「は、はあ……しかし……」

そうは言われてもウチもオカンも困惑する。

いくらヒルデガルド陛下のお奨めとは言つても、さすがにあんなガキンチヨみたいな男の子とバコつて、尚且つ孕ませてもらえっちゆうても……。

「……ヘルガ様、マルグリット様、私もヒルデガルド陛下と意見を共にします。斯く言う私も、近い将来にシヨータ君との子を授かりたいと思つています」

はあ? う、ウルスフはん?

いきなり何言つてんのん?

「あの子を見た時……いえ、あの子の逸物を見た時、私の子宮は彼の精子を欲しました。女は頭や心で嘘をつけても、

子宮は嘘をつけません。私は三十目前にもなつて未だ子を授かる事はありませんでした……でもシヨータ君となら、この先何人でも元気な子を産めそうなら……そんな気がするのです♡」

「ケヒヒ……堅物のウルスラをしてここまで言わせるのじやよ、あの小僧は。今はまだお主らも疑問に思つておるじやろつが、覚悟しておれよ？ シヨータのチンポを、精液を、そしてその心意気を直接感じ、堕ちぬ女は居らぬと妾は断言するぞ」

ウチはもう口をアングリ開けるしかないわ。

ヒルデガルド陛下もウルスラはんも、「冗談を言うてるよつには見えへん。

そしたら、本気……なん？

本気で、あの男の子と……な、生ハコしたいって、思てるん……？

「……陛下やウルスラ殿のような豪の者をも虜にするとは、それ程までにあの子は凄いつちゆう事ですかいな？」

あ、オカンも段々その気になつてる。

ベロツと舌舐めずりして、あの子との生ハコガ子孕みセックスを想像しとる顔や。

ウチらを産んだ後も、度々オトンの目を盗んでは執事や侍従の男の子をつまみ食いしとるの、知つてんねやで？

「ケヒヒ……ヘルガ殿も興味が湧いたかや？ じゃが、まずは娘御達に味わつてもらうのが先じやて。マルグリットよ、もし気になるようなら、シヨータの部屋へ行つてみよ。そこでシヨータに抱かれれば、ミハエル如き小物の事なんぞ綺麗さっぱり忘れられるぞよ？」

その時のウチはどうかしてたんや。

いくらヒルデガルド陛下の御言葉とは言つても、あんなガキンチョと……生ハコしてる自分を……ちよつとも想像するやなんて……。



せやけどウチは好奇心を抑えきれんかった。

ウチはセックスの経験がある言うても、ほんの二十人程度で、大半がこのヴァルハラ・オティンティン館の男娼相手や。

インク姉ちゃんは頑なに「初めてはミハエル様と！」つて言うて他の男娼を買わへんかったけどな。

ウチは大体『天』か『竜』の男娼を買つてたけど、やっぱり帝都最大の男娼館だけあって、テクニックはグンバツやった。

たった二時間の奉仕でも、ウチのセックス慣れしてない

身体は下口ト口に蕩けさせられてもった。

このランクでこれだけ気持ちええねんやったら、最高ランクの『神』の男娼なら……ナンバーワンのミハエルとやったら……。

って夢見てたんもついさつきまで。

もつミハエルとバコれるチャンスも無いやろなあ。

せやけど、そのミハエルすら問題にならんやうな噂のあのショータっちゅうガキンチョ……一体どんなヤツなんやろ？

逸る気持ちを抑えつつ、ウチはショータの部屋を目指す。

途中で会った栗毛のキツネ目メイドにショータの部屋の場所を聞いて、ウチは何故か忍び歩き気味に向かう。

「ここが、あの男のルームね……！」

建物内の二階『地』のフロア。

ドアには札が掛けられとって、手書きでショータって名前が書かれとる。

ドアノブに手を添えて、ゆっくりと回す。

鍵は……掛かっている。

小積こしむけな……ウチにかかれば鍵なんぞ無意味や。

ウチは古代語魔法の『解錠』を唱える。

カチリ、と小さな音を立てて鍵が開いた。

ホンマはこういう事に魔法を使うべきやないねんけど。中に人が居るかどうかを確認する為に、わずかに扉を開いたウチが目にしたんは……。

とんでもない光景やった。

中に居るんは、二人。

椅子に座る褐色銀髪の美女と、その前に立つ黒髪のカキンチョ。

美女は言うまでもなく、ウチの大好きなインク姉ちゃん。

そして黒髪のカキンチョは、ショータや。

インク姉ちゃんとショータは、何やら話し込んでる。

何でか知らんけど、二人とも息が荒い。

っちゅうか……二人の距離、やたら近ない？

何してんのやる……とウチが見ていた次の瞬間！

インク姉ちゃんがいきなりショータにキスしよった！

「(んなっ!? い、インク姉ちゃん!?)」

嘘や……あのインク姉ちゃんが……自分から男にキスするやなんて!?

あのミハエル命のインク姉ちゃんが。

ミハエル様に誤解されるから言うて、他の男娼ともよう喋らんかったインク姉ちゃんか。

男とキスはあるか、手エも満足に繋いだ事の無いインク

姉ちゃんが。

「ニールツ、ジウルツ、って音がこつちにまで聞こえて来るような、こつついキスしてる……」。

嘘やん……あんなに舌まで絡めて……！

イング姉ちゃんが……ファーストキス（多分）をあんなに情熱的に……しかもあんなガキンチョと！

ああ……イング姉ちゃんの舌が……。

シヨータの唇や舌や口中をべろべろと舐め回してる……。

……。

それどころかシヨータの唾をジウルジウル吸ってる……。

あんなエロいイング姉ちゃん……初めて見るわ……。

普段は男娼の胸元が見えただけで顔を真っ赤にしてたくせに……何であんなエロいキスが出来んねん……。

それとも、これが本当のイング姉ちゃんなんか……？

ウチがそんな事を考えていると、イング姉ちゃんとシヨータはゆっくりと唇を離す。

お互いの唇と唇の間には、お互いの唾液が絡み合ってるよオオって糸引いとる。めっちゃエロい。

でもそれで終わりやなかった。

イング姉ちゃんは何かを決意したような顔になって、おもむろに胸当ての留め金を外した。

ブルンって音が聞こえそうなくらい、大きくて立派な、

イング姉ちゃんの胸が溢れ出る。

ウチはイング姉ちゃんの大きくて柔らかい胸が大好きやけど、世の男共は違う。

男はみんな小ぶりの胸が好きで、男共が忌み嫌う大きな胸は、女達の劣等感の象徴そのものなんや。

イング姉ちゃんも例外やない。いつつも大きな胸を隠すように、前屈みで縮こまっとった。

でもイング姉ちゃんは、そんな自分の最大のコンプレックスを感じる胸に、シヨータの顔をグイッと押しつけた！

そ、それはアカン！ そんなんされたらシヨータが泣きよるから！

……あ、あれ？ 泣いてへんし、嫌がってもない？

むしろ、自分から抱きついて胸の感触を味わってる？

そんな……あり得へん！

女の胸を……しかもイング姉ちゃんみたいに大きくて柔っこい胸が好きなの男なんか居てるわけないのに！

でも、もしそんな男が居たら……ひよっとしたら、イング姉ちゃんは幸せになれる……？

解らへん。ウチの頭はかつて無い程に混乱してる。

一体何やねんあのシヨータっちゅうガキンチョは!? 散々っぱらイング姉ちゃんの胸を楽しんだと思たら、

まだイング姉ちゃんとべろチューしてるやんけ！

何やねん！ 羨まし過ぎるやろ！

っちゆうかベ□チユーし過ぎやろ！ どんだけベ□チユー

ー好きやねん!?

男のくせにベ□チユー好き過ぎるやろがい！

ウチがここの男娼とキスを求めても、唇の先でチヨンと触れて終わりやねんぞ！

ウチが強引に舌入れようとしても、必死こいて歯を食い縛ってガードしとんねんぞ！ それをお前は！ ベ□ベ□チユーチユーし過ぎやっちゆうねん！

アカン！ 何方腹立ってきた！

イング姉ちゃんはズルいわ！ ウチの気も知らんと、ミハエル以外の男と乳繰り合ってたからに！

こら一言文句言わな気が済まん！ 今すぐ部屋の中に踏み込んで、そのままのがキンチヨに説教かましたる！

そう思たウチは、トアノブに手を掛ける。

せやけどその時、ウチは信じられへんものを目にした。

その時の衝撃は忘れられへん。この次の日もそのまた次の日も、夢に見る程に。

ブルンツ！ ベチーンツ！

イング姉ちゃんがショータのズボンとパンツを一気に脱

がすと、そこから現れたのは馬鹿げた大きさの逸物やった。

……何なんアし？

ち、チンチン？

いや、ちやうわ……あんな……チンチンと違う……そんな可愛らしいモンやない……。

あんな……マラヤん……。

その精液まみれのマラは、強烈な青臭さを纏って、そのニオイは部屋の外に居るウチの方にまで香って来て……。

そのむせ返りそうなニオイを嗅いだウチは、思わず膝から崩れ落ちてしもうて。

それから、一瞬たりともそのデカマラから目が離せんようになってもてた。

アカン……あのマラはアカン！

あんな反則やん！

何やねんあのデカさ……エグ過ぎやろ！

太くて長いだけやない。あの反り返り、エラの張り具合、先っぽがお腹につくくらいの勃起力……全てに於いてウチが今まで見てきたチンチンとは桁違いや！

ああ……イング姉ちゃんがマラに類すりしてる!?

顔をザーメンまみれにして、ウツトリして……イング姉ちゃんの黒い顔が、あつという間に白くなってもった！

エエなあ……エエなあ……あの量のザーメンだけで、他

の男娼の何発分……いや、何日分やねん……。

スゴいわ……アイツ最高やわ……。

ヒルデガルド陛下やウルスラはんがべた褒めしてたんも、
今なら理解出来る……。

見た目は平凡やしバツとせえへんけど、セックスに関しては、多分アイツ以上の男なんぞ存在せえへん……。

どんだけ他の男娼のちっさいチンチンを寄せ集めようが、
シヨータのマラー一本にすら太刀打ち出来へん。

あのデカマラやったら……ウチのオ○コの奥の奥まで、
ザーメンで満たしてくれる……。

アカン……ウチのオ○コが泣いてる……♡

シヨータのデカマラが……濃厚なザーメンが欲しい言う
て、ピシヨピシヨになってもうてるう……♡

欲しい……シヨータが欲しい……。

キスして欲しい……デカマラ入れて欲しい……ザーメン
ぶっかけて欲しい……。

その時のウチは、シヨータのマラが欲しなり過ぎて、気
がついたらオナこった。

「あぶっ♡ んひっ♡ ごっつい……あのマラ入れたい……
…ウチのオ○コで、シヨータのマラをズボズボってコキた
いい♡♡♡」

いつ誰が通るかも解らん廊下で、シヨータとイング姉ち

やんの乳繰り合いをオカズに、グッチョグチョのオ○コを
自分の指で慰めとった。

【イングリット、虜になる】

「んっ、んぐっ……ぶはあ♡ んむっ♡ はぶっ♡」

私はシヨータさんの精液を全て飲み干し、更にもっと精
液をねだるように、オチンポの中に残った精液までチユー
チユーと吸い取る。

舌の上に残るエグみ、粘りつく喉越し、鼻腔をくすぐる
生臭さ……全てが私を虜にして離してくれない。

ああ……精液がこんなに美味しいなんて……♡

オチンポがこんなにも、私の心を満たしてくれるなんて
♡……♡

私の身体に触れる事さえしてくれなかったミハエル様に
操を立てて、今までこんな幸せを逃していたなんて……！
でももういいの。

もう我慢する必要も無いわ。

ミハエル様は私から離れてしまったけれど、代わりにも
っと素晴らしい殿方が私を見つけてくれた。

シヨータさん……いえ、シヨータ様が……♡

シヨータ様は素敵な殿方です。

シヨータ様は私を綺麗だと言ってくれる。

この黒い肌も、醜く太った身体も、宝石のように大切に扱ってくれる。

ああ……ミハエル様とは正反対な見た目ののに……美しさではミハエル様に遠く及ばないのに……。

でも、シヨータ様はこんなダメな私にとても優しくしてくれるの。

それは上辺だけのミハエル様の優しさとは全てが違っていて。

シヨータ様は私に触れてくれる。

私なんかは、とつても情熱的なキスをしてくれる。

私の顔を、口を、舌を、喉を……美味しい精液でいっぱい満たしてくれる。

もつともつと、シヨータ様に触れて欲しくなるの。

私の中からミハエル様の面影を追い出すくらい、シヨータ様の手で、お口で、お……オチンポで……私を……シヨータ様の色に染めてください！

「い、イングリットさん……僕……イングリットさんのおっぱいとか、オマ〇〇とか……触りたい、です……つてか、ここまで来てイングリットさんに触れないなんて、生殺しです……」

私がシヨータ様のオチンポを舐めて綺麗にしていると、シヨータ様は恥ずかしげにそう言ってくれて。

そんな……そんな事までして頂けるなんて……。

信じられない……私が、殿方にそんな風に欲情してもらえるなんて……。

「わ、私なんかのだからしない身体を触りたいだなんて……シヨータ様は変わってらっしゃいます……それとも、こんな醜い私に……同情してらっしゃる、とか？」

どこまでも卑屈な私。

でもそれも当然です。私はどこに行っても、殿方達の無遠慮な蔑視と嘲笑の対象だったのだから。

今更、そんな慰めなんて……。

「だらしなくないよっ!!」

ムギユツ！

「びゃっ!!」

し、シヨータ様!? い、いつの間に私の後ろに!?

つて言うか……わ、私の胸を……掴んで……るっ♡

「ほら、こんなに柔らかくて、温かくて、触り心地がいいおっぱいなのに! それにこの健康的な褐色の肌がたまらないよ! オマケに形も綺麗で、乳首もピンク色で、とても最高のおっぱいじゃないか!」

シヨータさんはそう言つて、私の胸を両方の手でもみく



ちゃにしてくれる。

指先でサワサワしたかと思えば、キュッと強く掴んだり、固くなった乳首を「コリコリ」ってつまんだり。

こ、こんな……こんな私が、殿方に胸を揉んでもらえるなんて……夢みたい♡

シヨータ様の手、小さいけれど……とっってもチカラ強く、触れる度にビリビリってなって……。

タメえ♡ 何も考えられない♡

「あひっ♡ む、胸が……気持ち、良いのぉ♡ 殿方に、触られる、のって……こんなに気持ち良いのですかぁ!？」

「イングリットさん……もしかして、おっぱい揉まれたのって、初めてなの?」

「は、はひ♡ 初めてれしゅう♡ み、ミハエル様にもあ、一度も触られてまひえん♡」

「よかった……やっぱリミハエルは馬鹿だよ! こんな最高のおっぱいを触らないなんて! アイツは大馬鹿のタマ無し野郎なんだ! でもその分、僕がイングリットさんのおっぱいを独占出来るんだ!」

ムギュッ、ムニギュッ、グリユッ。

はひひひひひ♡ わ、わらひの胸ええええ♡

しゅごい♡ シヨータ様の指でえ♡ お胸が気持ち良
いよおおおお♡

シヨータ様の指が触れた所が、熱くて、ビリビリして、ジンジンしてええええ♡

む、胸だけで……イグうううウウううッ♡♡♡

【マルグリット、我を忘れる】

す、スゴい……。

イング姉ちゃんが、胸をこねくりまわされとる……。

イング姉ちゃんの顔、すっかり薄けきって……滅茶苦茶アクメ顔になってるやん……。

あんなに胸を無茶苦茶しよる男が居るやなんて……。

あひっ♡ う、ウチの乳首も……固なってる♡

乳首も……お豆さんも……「コリコリ」ってえ♡

い、イク……ウチもイッてまつ♡

男にイカされるイング姉ちゃんを見ながら、ウチもアクメってまつ♡

ひっ♡ ひっ♡ つひひひひひんっ♡

と、ウチの全身が痺れて、震えて、飛び跳ねる。

今までのオナニーでは感じた事の無い高みにあっさりとして、そのまま脱力したウチの身体が、ドアにもたれ

掛かって……そして……。

【イングリット、取り乱す】

キィィ……バタンッ。

あれ？ ドアの方から音がしたような……？

頭にボウツと霧もよほの掛かった状態で、音のした方を確認すると……。

「……………ま、マール!？」

そこには私と同じ褐色の肌の、長くしなやかな金髪をツインテールに結んだ少女が倒れ伏していた。

でもその顔は苦痛の表情ではなく、むしろとても穏やかな、全てを満たされたよくな安らかな寝顔で。

「え？ 誰？ って……あ、さっきミハエルと一緒に居た子だ」

「あ、あの……私の妹です……でもどうしてこんな所に……?」

マールの全身は汗みずくで、特に腰布の辺りがグッシヨリと夥しく濡れています。

その意味するところは、さすがに処女の私といえども理解出来る。

っ、つまじ……。

「……見られちゃってたかな？ 僕とイングリットさんが

イチヤイチヤしてたの」

あああああ〜！ やっぱりそうですよねえ〜！

どうしよう……マールにあんな所を見られるなんて……。でもどこから？ キスから？ フェラチオから？ 胸を揉まれてるところから？

もしかしたら最初から……うああ、恥ずかしい〜！

「ま、とりあえずベッドに寝かせますね……よっと!」

シヨータ様はそう言っ、倒れているマールをひよいと王子様抱っこしてベッドまで運んでくれた。

マールよりも小さいのに、難なく王子様抱っこをするなんて……私の股間がまたキユウンと疼いてしまっ。

そのままマールはベッドに寝かされ、私はどうしていいのかわからずオロオロしてしまっている。

そんな私を、シヨータ様は正面からキユツと抱き締めて私の胸に顔を埋める。

私は思わず「ふわっ!？」とはしたくない叫び声を出してしまいました。

「……ねえ、イングリットさん、今日はこのまま終わりにする？ それとも……妹さんが起きるまで、やれる事やっちゃっ?」

シヨータ様は潤んだ瞳で私を見上げ、再び硬くなったオチンポを私の太ももにスリスリと擦りつけている。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>